

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【食】【交流】

1. 都道府県、市町村 山口県萩市<sup>はぎし</sup>
2. 事業者名 うり坊の郷katamata
3. 取組みの名称 「元気な片俣の創出」-交流拠点が元気の源-
4. 取組概要等

概要

萩市むつみ地域の北東部にある片俣地区は、5集落(小国・御舟子・中橋・金谷・札の奥)からなり、水田を囲むように広がる山裾の中心に位置し、水稻・トマト・肉用牛の生産を中心とする山間の農村である。当地区は旧村としての地理や人間関係にまとまりが深く、2つの営農組織や地区の特徴である「いのしし牧場」等、社会的資源が豊富である。平成12年当時、人口は70世帯、185人で高齢化率は30%であり後継者問題や担い手不足にあえぐこの地区において、この資源を活かして、副収入の確保、仲間づくり、都市農村交流、案内拠点、女性や高齢者の生きがいの創出等、生涯現役を唱える一部住民の声にこの地域は奮起した。

「高齢者に見合った生産活動がしたい」、「生産物を認められる喜びを」等の要望を集約し、平成13年、「片俣農産物等交流販売施設」が完成。片俣地区住民による新組織「うり坊の郷katamata」を発足し、営業を開始した。組織にかかわる片俣地区正会員と平成13年に設立した農事組合法人小国ファームが技術と能力を活かし、農産物部会、加工部会、イノシシ部会、食堂部会の4部体制のもと「元気な片俣の創出」にむけ交流拠点の運営が始められた。

「うり坊の郷...」は、本組織名で施設名称、看板商品でもあり、イノシシ肉は安定供給されている。そもそも片俣地区は、イノシシによる農作物被害が多く悩みの種であったが、それを逆手にとりそのイノシシを地元の振興に一役買わせた。平成13年には中山間地域等直接支払制度を活用し、小国集落において「いのしし牧場」を整備し、今では50頭のイノシシが放牧されており、目で楽しませ集客効果の上がる施策へと展開している。

イノシシ部会では、農事組合法人小国ファームが、イノシシ肉を加工して出荷している。

食堂部会においては、イノシシ肉を活用したメニューで来客をおもてなしする。シシ肉うどんや猪肉定食など地域の魅力を余すところなくアピールしている。また、近年では猪肉定食に用いる食材も片俣地区で捕らえられないものは山口県産のものを使い、食器も萩焼を用いるなどしてこだわりの地産・地消定食を提供している。

平成15年には、片俣地区住民の強い要望により本施設が「道の駅」に指定され、平成16年に、案内所を広く設けて、リニューアルオープンした。ますます集客力をあげ、交流拠点としての役割を十分に発揮する契機となり、元気な地域づくりと交流拠点づくりを進めている。

活動の規模

項目	H14	H15	H16	H17	H18
売上	26,601	31,180	49,785	50,400	55,041
解説	単位：千円 店舗売上額				
来客数	45,000	45,000	56,000	59,000	62,000
解説	単位：人				
イベント回数	1	2	2	2	2
解説	単位：回 ルーラルフェスタ開催と地元ふるさとまつり参画				
イベント参加者	400	600	700	700	700
解説	単位：人				

### 活用している地域資源

- ・片俣農産物等交流販売施設(道の駅)
- ・いのしし牧場(イノシシ肉)
- ・トマト(桃太郎)(トマトソフトクリーム)
- ・農事組合法人 小国ファーム
- ・特定農業団体 金谷営農生産組合

### 地域活性化のポイント

道の駅「うり坊の郷katamata」は、片俣地区住民の互助努力や多数の来客者に支えられ、地区住民の望む「交流拠点」として成長してきた。

当施設は、地域住民が気軽に立ち寄れる場所であることが大前提であり、そのための雰囲気づくりや配慮は忘れずに手掛けている。販売店員や案内係員が常に「おもてなしの心」で出迎えてくれるからこそ片俣地区住民のいこいの場となり得ている。

また、販売するイノシシ肉や農産物も農事組合法人小国ファームとの連携・協力により、安定供給を可能とし、生産力・販売力向上といった相乗効果をもたらした。

### 事業の今後の展開方向

「うり坊の郷katamata」は道の駅であるため、地域外からの来客者は無論大切であるが、なにより地域住民がくつろぎ、笑顔で話せる「たまり場」であることが交流の原点である。これまでは組織の関係者や参画者が一丸となって交流拠点を盛り上げてきたが、違った目線でこの交流拠点を見直し、顧客や様々なニーズに対応するための変革の契機が訪れている。

今までは大人の目線・尺度だけで築きあげてきた感のある交流拠点。これからは、こどもの目線や感覚、地域外からの視点、常連客からの視点からの指導・助言を今まで以上に真摯に受け止めるとともに、組織よがりではなく交流拠点は「みんな」で作りあげるものであると再認識したうえで、片俣地区住民と来客者によるアイデアと協力をもって、ますます元気な地域づくりと交流拠点づくりを目指していくところである。

